

犯罪の被害者と記者の小さな勉強会

かわはら みちこ
河原 理子

地下鉄サリン事件で夫を亡くした高橋シズエさんと、私と、同僚記者と、「犯罪被害者の話を聴く会」という小さな勉強会を開いてきました。集まるのは、新聞社や通信社の記者たち。途中から、放送局の人も加わりました。事件や事故にあい「被害者」や「遺族」になった人たちをゲストに迎えて、本当のところどんな体験をしたのか、取材や報道に対して思うことなどを聴いて、ざっくばらんに意見交換する会です。

始めたのは、2000年。来てくれる被害者・遺族がどれだけいるか案じましたが、心を開いて話してくれた人たちのおかげで、多くのことを教わりました。聴いて初めてわかることがたくさんありました。好奇心と吸収力が旺盛な高橋さんは、私より取材報道に詳しくなりました。「犯罪被害者」も、一人ひとり違います。「悲しみ」「怒り」だけではなく、多くのことを考えます。その実際の姿、社会に求めることを、広く知ってほしいし、何のために何を伝えるのか、情報を社会が共有することの意味を、情報の受け手にも考えてほしい……そんな願いから、今年1月に高橋さんと共同編集で、勉強会を『〈犯罪被害者〉が報道を変える』(岩波書店)という本にまとめました。

私が最も学んだことは、近づいて、胸を開いて直接話すこと、謙虚に聴くことの大切さ、かもしれません。そうすれば、わかり合えることがある、結論が違って話ができる——報道側から言うと不遜ですが、高橋さんは「最終的に何かを決めるものは、人と人との出会いであり、その後の信頼関係」だと書いています。そんな人のつながりが再構築できたら、簡単にラベルを貼って人を分けて終わりにする世の中が、少しはよくなるのではないのでしょうか。

■プロフィール 1961年東京都生まれ。1983年から朝日新聞記者となり、社会部、日曜版編集部などを経て、現在編集委員。2000年から高橋シズエ・星野哲と共に「犯罪被害者の話を聴く会」を主宰。著書に『犯罪被害者—いま人権を考える』(平凡社新書)、共著に『この地球で私が生きる場所—海外で夢を追う女たち13人』(朝日新聞日曜版編集部・編 平凡社)、など多数。